

記述が変わった教科書

⑤「土農工商」

私が子どものころ、そして教師になってからも「土農工商」という江戸時代の身分制度を教わり、教えてきました。土は支配階級の武士、農は農民、工は職人、商は商人。江戸幕府にとって一番大切なのは武士の生活を支える年貢であり、農民に税を課す代わりに身分を一番目としていたことや、更に低い身分を作り「上見て暮らすな、下見て暮らせ」という考えを農民に植え付けたと教えてきたものです。

今、そういうことが見直されるようになってきており、教科書では「土農工商」とは記述されていません。実は「土農工商」という概念は古代中国のもので、四つの身分というより「あらゆる人々」意味しました。にも関わらず、江戸時代に儒学者が強引に日本の社会に当てはめ、それが誤った形で明治以降も受け継がれていったようです。

その後、近代史研究が進むと共に、江戸時代の身分には、支配者の武士と被支配者の百姓・町人という二つがあるだけだということが分かり、今では「武士」と「町人・百姓」という分け方をしています。村に住むのが百姓、町(主に城下町)に住むのが町人(職人と商人)という

ように居住区や職業を表すに過ぎません。また「農工商」は対等な関係で、あくまで「職業の違い」に過ぎず、「身分」を「職分」とする見方もあります。「農民」という記述も「百姓」に変わり、文字通り、農業だけに限らず、狩猟、漁業、林業など様々な職業を「百姓」としたのです。百姓の生活は、かつて教えられてきたような悲惨なものではなく、煙草を嗜んだり、お伊勢参りをしたりする百姓もいました。

更に、身分間の移動もできたことも分かっています。金をためて武士の身分を買ったり、金をもたらして武士に取り立てる藩もあつたりしました。

教科書には、百姓や町人とは別に差別されてきた人々の記述もあります。

厳しく差別されてきた人々

百姓や町人とは別に厳しく差別されてきた身分の人々は、仕事や住む場所、身なりを百姓や町人とは区別され、村や町の祭りへの参加をこぼまれるなど厳しい差別のもとにおかれ、幕府や藩も差別を強めました。これらの人々は、こうした差別の中でも、農業や手工業を営み、芸能で人々を楽しませ、また、治安などによって社会を支えました。

「土農工商」と言う身分を作り、農民の武士に対する不満を反らすためにそれ以下の身分を作る必要があつたとして、「被差別部落は江戸幕府によって意図的に作られたものである(政治起源説)」と教えてきました。身分制度とい

う序列を助長するような教え方をし、被差別部落に対するマイナスイメージを植え付けてきたのです。このような考え方は、今では完全に否定されています。それを教えてきたのですから、かつての同和教育は大変罪深いものであると思います。

連載—三六年間の教育を振り返る④—

教育残酷物語—学テがもたらしたもの—

ずいぶん前の夏休みに、教師の小さな学習会があり、そこで、一九六〇年代に香川県の小学校に勤めておられた先生から学力テストがあつた当時の様子を聞くことができました。

香川県は学力テスト六年間連続全国一位でしたが、その実態はひどいものだったようです。テストの日には成績の低い子どもを休ませたり、テスト中も担任が誤答に対して答えを書き直すようにコツコツ机をたたいて促したりしていたようです。

当時は、テスト準備のための対策が過熱していました。どの学校も成績を上げようと必死で、隣の愛媛県は「香川に追いつけ、追い越せ」がスローガンになっていたようです。当時の様子を「愛媛教育残酷物語」として書籍にも著されています。勤評(勤務評定)学テ(学力テスト)の嵐が吹くこの時代、校長が組合と教委の板挟みになって自殺しています。

これは、過去のことですが、同じ様な事が再

び始まった学力テストでも起こっています。二〇〇七年、東京都足立区教委は試験前に問題用紙を事前に校長会で配ったり、教師が誤答している児童に合図するなど不正が発覚したりしています。更に、障害のある児童を採点から外すことも起きています。この背景には、学力テストの成績の伸び率に応じて学校予算を配分する制度があったためです。足立区はこの制度を改めたようですが、まさに、平成版「教育残酷物語」の再来であり、過去の教訓が全く生かされていません。それどころか、成績を上げるために障害のある児童を外す行為は人権意識欠落の表れであり、そういう教師がいること自体嘆かわしいことです。

テストをして、子どもの実態を知り、それを授業の改善に生かすことには、何の問題もありません。ところが、他県では過去問題をテストの前に取り組ませ、テストのためのテストを行

私が教師になる前からの教育の流れ

| | |
|------|---|
| 1961 | 学習指導要領改訂 道徳の設置 61-64 学力テスト実施 |
| 1971 | 学習指導要領改訂 現代化カリキュラム (詰め込み) |
| 1980 | 学習指導要領改訂 |
| 1985 | 小学校採用となった七条養護学校で体育教師として教員が始まる。 |
| 1988 | 養護学校から小学校へ |
| 1992 | 学習指導要領改訂 新学力観 (個性) 生活科の導入 |
| 2002 | 学習指導要領改訂 ゆとり教育 「生きる力」 総合的な学習の時間 完全週五日制 |

今回はこの辺りのお話

っています。これがフェアな全国統一学力テストと言えるのでしょうか。また、テストの結果が返ってくるのが遅くて、到底今の授業には生かせないものとなっています。三十六年をすいぶんさかのぼりすぎました。今回は本題の「ゆとり教育」について振り返ってみたいと思います。

—子どもの日記から—

家族の温かさにホッと

第二回目—満君の日記から

はじめの日記は、兄が弟にお金を借りにくることを書いた日記で、後の日記はお母さんが出てきます。やっぱり家族の日記は、温かさが伝わってきます。満君の家族はとてもたのしいです。子どもの日記はそんな家族の温もりに触れることができ、幸せのお裾分けをしてもらっています。だから、子どもの日記を読むのはいつても楽しみなのです。

□「万田金ゆう」

満

ぼくのお兄ちゃん、毎月たたくさんのおこづかいをもらっているのに、月の始めにお金を使って、ぼくに借りにきます。

ぼくは、お金をあまり使うひまがなくて、お金がかんだんだたまってきます。そして、お兄ちゃんが月の終わりにになると、「万田さん。といち(十日で一割の利息)でお金を貸してください。」

と言ってきます。ぼくはしょうがないから、いつもお金を貸しています。

そして、次のこづかい日になると、お兄ちゃんがぼくに借りていたお金を、利子つきで返してくれます。だから、ぼくのお金は、また、たまっていきます。

次に、またお金を貸すときは、利子をもっとつけてお金を貸したいです。 1998.5.13

□「みんな」

満

ぼくんちでは、学級だよりの「みんな」が本みたいになっている。それを見ていたら、初めは、みんなちよっとしか書いていなかったけど、みんなだんだん長い文章をかけるようになってきている。

ぼくも、初めは書くのがいやだったけど、お母さんが、「みつるの言うてることや思ってる事は、おもしろいし、けっこうドラマやで。」

とほめてくれるので、だんだん作文がいやじゃなくなってきた。

よく考えると、ぼくの家族は、ふつうの人たちとは考え方がちよっとちがうみたいだ。家でしゃべっている事が全部、吉本新喜劇みたいだから、ドラマがいっぱい生まれる。ちよっと、うるさくて、一人になりたいと思うときもあるけど、お母さんの、「ガハハ。」

という笑いがなかったら、やっぱりこまる。 1998.12.22